築港100年

うの港

今は昔 玉野のはなし

瀬戸内海特有の温暖な気候と、海・山などの自然に恵まれた町。
かつては、岡山平野の南、「吉備の穴海」と呼ばれる、高梁川、
旭川や吉井川が運ぶ土砂で遠浅となった海の沖に浮かぶ島であった。
江戸時代に入って、干拓が行われ本州と陸続きになり、
四国への玄関口として、宇高連絡船やフェリーの発着港、
また、造船の町として発展してきた。

王子ヶ岳・渋川・日比エリアの伝説と逸話

王子ヶ岳の伝説（8人の王子）

王子ヶ岳にはかつて8人の王子が住んでいたといわれる。柴板王子、坂手王子、笹割王子、峰の王子、日の王子、鎌投王子、谷の王子、鮫刺王子の名が石や神社に残っている。

大槌島の伝説

昔、この島から大蛇が日比にあった八幡様に渡って来て人を悩ませた。その頃、日比に住む加地藤左衛門という人がいた。彼は、弓の達人であった。

ある夜、夢の中で神様のお告げを聞いた。夢からさめると枕もとに弓と矢があった。彼は翌日、大蛇退治に海辺に出てみると、大蛇は海辺の大きな松に巻きついていた。彼は渾身の力で矢を放つと、狙いをたがわず大蛇の喉に命中し大蛇は死んだ。

人々は神のお助けと藤左衛門の勇敢なことに感心しほめたたえた。

なお、この大蛇の鱗と顎が日比の御前八幡宮に祭られている。

日比観音院

日比観音院は天神様を祀る珍しい寺である。

これは菅原道真が筑紫へ下る際、海の難所である雷灘を通らなければならなかった。道真は海路の安全を祈るため、日比の港に船を着け、この山に登って観音経を読誦した。

その際にこの土地へ祠を建てたことに始まる。

朝鮮通信使

江戸時代、朝鮮国王から幕府へ派遣された友好使節で、船団は沿岸から動員された船が加わり1000隻を越えた。そのにぎやかな様子は、日比の旧家に伝わる絵巻の中に描かれている。

西行法師と渋川海岸

保元の乱に敗れ、四国に流された崇徳上皇は寂しく生涯を終えた。西行は御陵にお参りしようと、渋川海岸まで来たが、強風のため舟が出ず、ここにしばらく滞在した。 西行の歌集「山家集」に滞在中の歌が掲載されている。

毎年2～3月に西行祭が開催される。

なお、渋川海岸は「瀬百選」「日砂青松百選」に選定されている。

藤棚

全長約９００メートルの藤棚は、毎年４月下旬から５月上旬にかけて見事に咲き誇る。

毎年4～5月に藤まつりが開催される。

シーボルトと日比港

長崎と江戸の往復の際、シーボルトは日比港で駐留し、塩田を見学している。『江戸参府紀行』には、見学の詳細が記されており、繊細な観察力で感想を綴っている。

参考文献 「玉野の伝説」著者・河井康夫 「玉野市史続編」

宇野港近辺の変遷

INFOMATION

●お車の場合
瀬戸中央自動車道
水島I.Cから R30経由
約30分
山陽自動車道
岡山I.Cから R30経由
約60分

●バスの場合（岡山駅）
宇野駅まで1時間
約45分

●電車の場合（岡山駅）
宇野線直通で約50分

大槌島 樽流しの伝説

（おおづち）

備前藩と高松藩とで、境界争いが起こったのは享保17年（一七三二）のことであった。

両藩の境界を決めるのに何かよい方法はないかと知恵者の彦九郎は考えた。

そして、ある日こっそりと大槌島から樽をながしたところ、樽は塩飽諸島の笠どを含んで流れた。この試しで気をよくした彼は讃岐側へ国境は樽流しで決めようではないかと申し入れた。讃岐側もそれは妙案だと、両藩立会いのもとで大槌島から樽は投げこまれた。

しかし、どうしたものか樽は彦九郎の予想を裏切ってどんどん備前側に近寄っていった。彦九郎は青くなったが、どうしようもない。

こうして、両国の境界が決まり、塩石島は讃岐領になった。知恵者、彦九郎も潮流の変化には気がつかなかったのだろう。

この伝説は現在、宇野港から見える瀬戸内の島々の笠どが香川県になっている由来として、語り継がれている。

参考文献「玉野の伝説」著者・河井康夫「玉野市史続編」

発行：うの港13　編集・協力：スマイルネット玉情協　編集・デザイン：清水 直人　助成支援：(社)中国建設弘済会